

公益財団法人

愛媛県埋蔵文化財センター

45年のあゆみ



ごあいさつ

愛媛県では、昭和50年代に高速道路や本四架橋などの建設が本格化し、開発事業対象地区にある埋蔵文化財の扱いが大きな問題となり、県教育委員会内での対応が難しくなってきました。そうした状況を受けて、埋蔵文化財調査を専門に行う機関として、昭和52年、愛媛県の出損により、財團法人愛媛県埋蔵文化財調査センターが設立されました。

以来、愛媛県をはじめ、国や公團等が行う大型公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。平成24年度からは公益財團法人愛媛県埋蔵文化財センターに移行し、遺跡の発掘調査と研究、普及活動に取り組んでいます。

この小冊子は、設立から45周年を機に、これまでセンターが取り組んできたことをまとめ、県民の皆様にご理解いただくとともに、これから埋蔵文化財の保護・活用の一助になればと思いまい、作成したものです。

今後とも、当センターに対しまして、なお一層のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和5年春

公益財團法人 愛媛県埋蔵文化財センター 理事長 前園 實知雄

目次

I センターのあゆみ	
1. 設立の目的	1
2. 沿革	1
II これまでの調査概要	
1. 事業予算の推移	2
2. 発掘した遺跡と報告書	2
3. 調査人員の推移	3
III 主な調査遺跡	
1. 国土交通省開連	4
①上分西道路 / ②池の内道路 / ③中山川右岸の遺跡群 / ④朝日道跡 / ⑤朝倉下野田道跡 / ⑥古谷横枕道跡 / ⑦松森古原道跡 / ⑧北鬥門道跡 / ⑨長田道跡 / ⑩長松寺城跡	
2. 高速道路開連	10
①鹿ヶ岡古墳 / ②平坂丘遺跡 / ③平田山道路 / ④森公遺跡 / ⑤曾ケ谷2号墳 / ⑥東京崎遺跡 / 高見1遺跡 / ⑦水戸森道路 / ⑧大洲元城跡 / ⑨岩倉城跡	
3. 本四架橋(しまなみ海道)開連	14
①多々羅道路 / ②見近島城跡 / ③条大谷道路 / ④阿方道路	
4. 今治新都市開発開連	16
⑤阿方牛ノ江道跡群 / ⑥別名道路群	
5. 愛媛県開連	17
⑦木暮道路 / ⑧長網道路 / ⑨辻堂道路 / ⑩特田町三丁目道路 / ⑪湯梁城跡 / ⑫宮前川道路 / ⑬松山城三の丸武家屋敷群 - 明良振跡地 / ⑭上三谷藤田 - 鶴古道路 / ⑮大根道路	
VI 発掘調査・整理作業の流れ	26
VII 普及啓発活動	
1. 展示会の開催	28
2. 講座・講演会・シンポジウムの開催	32
3. 刊行物の発行	32
4. その他の活動	34
VIII センターの概要	
1. 組織	36
2. 役員・評議員	36
3. 職員名簿	36

I センターのあゆみ

1. 設立の目的(設立趣意書より)

文化遺産は、県民が長い歴史の中において、はぐくみ育ててきた貴重な財産であり、この貴重な財産を将来にわたって長く保存し、後世に守り伝えることは、歴史と風土に根ざした豊かな社会を維持発展させるうえにきわめて重要である。

特に埋蔵文化財の保護は、我が県土開発の進展の中で、今日ますます大きな問題になっている。

当財団は、埋蔵文化財の調査研究を行うとともに、埋蔵文化財の保護思想のかん養と普及を図り、地域文化の振興に寄与することを目的として設立する。

2. 沿革

- 昭和52(1977)年 5月24日 設立発起人会議を開催
5月31日 愛媛県教育委員会へ設立許可申請書を提出
6月 9日 愛媛県教育委員会が設立許可
事務局を松山市堀之内の愛媛県立歴史民俗資料館内に置く
6月20日 松山地方法務局で設立登記
昭和53(1978)年 1月 1日 調査員2名を採用し、発掘調査を開始
4月 1日 伊予郡砥部町に整理事務所開設(借地)
昭和55(1980)年 4月 1日 県から教員を調査員として派遣(平成23年度末で派遣終了)
7月18日 事務局を愛媛県庁第二別館へ移転
平成2(1990)年 4月 1日 事務局を県庁第一別館へ移転
平成3(1991)年 4月 1日 東温市(旧温泉郡重信町)へ整理事務所を移転
平成8(1996)年 3月11日 松山市衣山に整理事務所を開設
平成9(1997)年 4月 1日 組織改正により総務課、調査課、調査第一係、調査第二係、調査第三係の2課3係を新設
平成12(2000)年 4月 1日 衣山整理事務所を閉鎖し、重信整理事務所に統合
事務局を県庁第二別館に移転
平成14(2002)年 4月 1日 道後公園(湯楽城跡)の管理運営を県から受託(平成17年度末まで)
事務局を県庁第一別館に移転
平成15(2003)年 4月 1日 事務局を愛媛県三番町ビルに移転
平成17(2005)年 8月 8日 事務局と重信整理事務所を統合し、松山市衣山(現在地)に移転
平成18(2006)年 4月 1日 組織改正により調査課の調査第三係を廃止
平成23(2011)年 4月 1日 組織改正により調査課に担当課長、担当係長を新設
平成24(2012)年 4月 1日 公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センターへ移行登記
理事長に考古の有識者である前園實知雄就任(従来、県教育長)
組織改正により調査課に普及係を新設
平成25(2013)年 4月 1日 組織改正により調査課普及係を廃止し、資料係を新設
令和3(2021)年 4月 1日 調査課を県・国土交通省・農林水産省・資料担当のグループ制に

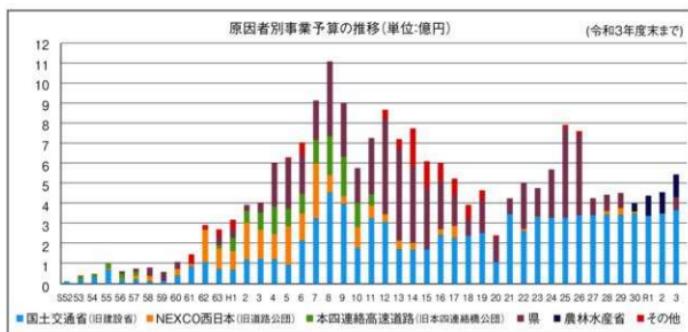
II これまでの調査概要

1. 事業予算の推移

昭和 52 年の設立当初から、国道バイパスや県の施設関係の発掘調査を実施していましたが、昭和 62 年頃から高速道路や本四架橋のルート上の遺跡調査が増加しました。さらに新空港道路はじめ県道の整備などに伴い、数多くの遺跡での発掘調査が必要となり、平成 8 年度までは右肩上がりに事業予算が増えました。

しかし、平成の前半で高速道路や本四架橋関連調査が一段落すると事業量は減少に転じ、その後、地域振興整備公による今治新都市開発事業関連や、県の道後公園(湯築城跡)整備、宮前川改修、県道改良事業などで若干持ち直したもの事業予算は減少していきます。

近年は、平成 17 年度に開始した今治道路など国土交通省事業の発掘調査が、概ね年 3.5 億円前後で安定的に推移しています。平成 20 年度の減少は、国土交通省との委託契約が県経由となり、予算措置の遅れによって生じたものです。県事業は、平成 24 ~ 26 年度に JR 車両基地の移設関連で急増しましたが、ここ数年は少ない状況です。一方、平成 30 年度には農林水産省の道前平野農地整備事業に伴う発掘調査が開始され、1 億円前後の事業として継続しています。



2. 発掘した遺跡と報告書

令和 3 年度までに発掘調査を実施した遺跡は 500 箇所、調査面積は 123 万 m² を超えています。内訳は、国土交通省や NEXCO 西日本(旧道路公團)の道路事業が多く、遺跡数では全体の 52%、調査面積では 64% を占め、これらの道路事業によって、大規模な発掘調査が行われてきたことを示しています。

これらの成果をまとめた発掘調査報告書は、これまでに 200 冊刊行しています。

原 因 者	遺跡数 (箇所)	総面積 (m ²)	報告書数 (冊)
国土交通省(旧建設省)	158	547,028	55
NEXCO西日本(株) (旧道路公団)	101	248,356	28
本州四国連絡高速道路(株) (旧本州四国連絡公団)	33	67,694	12
独立行政法人都市再生機構 (旧地域振興整備公団)	27	62,910	5
愛媛県(土木部)	102	171,766	64
上記以外の国・県・市・町	68	119,492	33
民間	12	17,297	3
合 計	501	1,234,543	200

*令和3年度末まで。現在発掘・整理中の遺跡は含んでいない

3. 調査人員の推移

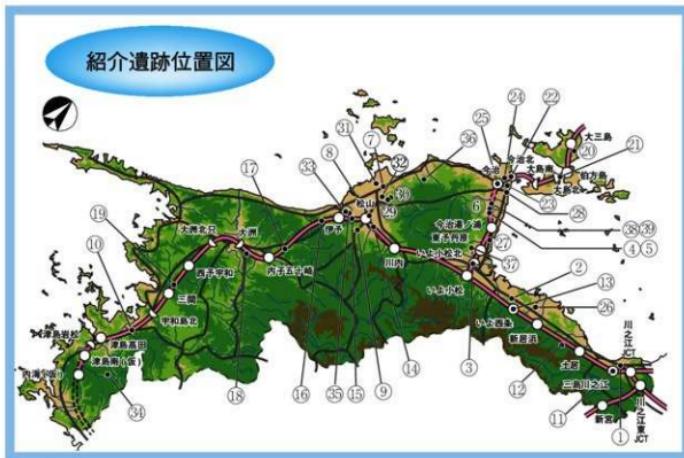
調査担当職員は、当初は2名のプロバー職員だけでしたが、昭和55年度より県教育委員会から教員の派遣が始まり、発掘調査量の増加によって平成11年度まで調査にあたる職員数は増え続けます。その後は、事業の減少に伴って職員数も減り、平成23年度で教員の派遣が終了となりました。

公益財団法人となった平成24年度以降は、より専門性の高いプロバー調査員を徐々に採用し、組織の充実を図っています。



III 主な調査遺跡

ここでは、調査の原因者(委託元)ごとに、主な遺跡を紹介します。



1. 国土交通省関連

昭和53年1月の国道33号砥部道路建設に伴う発掘調査をはじめとして、国道11号・33号・56号・196号のバイパス建設工事などに伴って、様々な遺跡の調査を行っています。また、松山市内では、松山環状線や松山外環状線建設に伴う調査を行いました。

センター設立当初から今日まで、国土交通省関連の事業が発掘調査の柱となっており、ここ10年は一般国道196号今治道路建設に伴う発掘調査を中心に展開しています。

《東予地域》

①上分西遺跡（所在地：四国中央市上分町、調査期間：H14.6～20.3、調査面積：30,189m²）

四国中央市街地の南東部で、松山自動車道三島川之江インターチェンジ(IC)から、国道11号と192号の交差点付近にかけて広がっている遺跡です。調査によって、繩文時代後期中葉の縄文土器群のはか、弥生時代から中世末までの集落域の変遷をたどることができます。

調査区北東部の乗安地区で、弥生時代後期の堅穴建物から使用痕跡のない九州型有溝石錠や鉄器、鉄片がまとめて出土しました。この石錠は瀬戸内海での使用例はなく、鉄素材とともに

九州から運んできた海人の姿をみることができます。

古墳時代初頭から前期前半には堅穴建物の大型・中小型が1組となった集落が調査区南側に営まれ、8世紀には調査区南端の低地部で人と牛の足跡や水田畦畔・水田面を確認しています。

古代では、乗安地区の8世紀の堅穴建物から、円面鏡や土馬が出土したことから、近隣にあったと推定される古代官道の南海道大岡駅に関する官人の居住区とも考えられます。また、費を連ねて煙道にした珍しい形態の窓もありました。

中世では、11世紀の欄柱建物や総柱建物が遺跡南側で確認でき、12世紀に乗安地区に小規模の建物群が建てられ、13世紀には調査範囲全体に建物群が広がります。13世紀後半には区画溝を伴う屋敷地や庇を持つ2棟の建物を中心に、柱穴祭祀も多く行われ、中心的な集落へと発展しますが、14世紀後半から15世紀前半にかけては居住域が縮小しました。

②池のうち ②池の内遺跡（西条市飯岡、S61.5～9・62.5～9、4,720m²）(H19.10～204、12,914m²)

昭和61年の国道11号西条バイパス建設と、平成19年の民間商業施設の建設に先立って調査が行われました。隣接する2箇所の調査では、縄文時代晩期のまとまった土器資料や、弥生時代中期の堅穴建物、奈良時代を中心とする掘立柱建物群などの遺構や遺物が出土しました。

弥生時代では中期前葉の堅穴建物のほか、中期後葉の堅穴建物などの遺構が最も多く検出されています。奈良時代の掘立柱建物は全体で28棟も検出されました。掘立柱建物は100～120m四方の範囲内にまとまって建てられ、さらに100mほど離れて、別の掘立柱建物群も見られます。中には柱穴がひときわ大きな掘立柱建物があり、その周囲が溝によって囲まれている特別な建物もありました。この遺跡の南側には古代官道の南海道が通っていたと考えられており、その沿線に造られた集落と言えるでしょう。



九州型有溝石錐・鉄器出土状況



古代建物の竪



弥生時代中期の堅穴建物



古代の掘立柱建物群

③中山川右岸の遺跡群 (西条市小松町大頭、H6.5～19.3、4 遺跡を 6 回の調査、33.590m²)



松ノ元遺跡 調査区全景(中央が道路遺構)

四国山地の山裾を東西にのびる松山自動車道が今治小松道路へ分岐する場所で発見された松ノ元遺跡では、古代の南海道か伝路とみられる道路遺構と条里地割を確認しました。

さらに大久保遺跡が隣接し、北東に少し離れて大開遺跡・松ノ丁遺跡があり、8世紀初頭から9世紀前半の古代の役所である官衙関連施設や集落、条里遺構となる坪界溝などの広がりが明確になりました。

古代の遺構以外にも、大久保遺跡では、弥生時代前期末の堅穴建物や土坑群から鋳造鉄器や大陸系磨製石器とその原材料が出土し、そのうち鋳造鉄器の斧は中国起源のもので、日本にもたらされた鋳造鉄器では最古級です。また、墳丘が削平されていた大久保1号墳の調査も行われ、古墳時代初頭の前方後円墳であることがわかりました。

④経田遺跡 (今治市朝倉下、H17.6～21.3、38.792m²)

今治平野内陸部の額田川中流域に所在する弥生時代から中世の集落遺跡で、一般国道196号今治道路建設に伴い発掘調査が行われました。



平形銅劍出土状況

弥生時代中期末の集落では堅穴建物11棟と平形銅劍埋納遺構が検出されました。平形銅劍は愛媛県と香川県を中心に分布しこれまで114口確認されていますが、発掘調査で出土した例は少なく、経田遺跡のほかには松山市六丁場遺跡と香川県一の谷遺跡が知られています。経田遺跡の平形銅劍は柱穴のなかに刃を下向きにして縦に突き刺したような状態で残され、銅劍の上部は破損していました。これまで平形銅劍は刃を横向きにして埋納されることが多いと考えられており、経田遺跡のような例は知られていません。埋納遺構は弥生時代中期末の建物などの上に形成されていることから、集落の最終時期か人々が集落を去った後に埋納されたと考えられます。

古代の掘立柱建物は30棟がまとめて検出され、なかには布掘りで大型の建物も含まれます。基壇などに使われる壇や国分寺と同文の瓦が出土していることなどから、国分寺管理と一体化していた官衙に関連する特別な建物群として理解できます。



国分寺と同文の瓦

13世紀の集落では両側に溝を備えた直線的な道路が形成され、周囲にはかなり大型のものも含む掘立柱建物が密集して建ち並んでいました。土師質土器の廃棄土坑も多く見つかり、一般的な集落ではなく、頓田川に隣接する立地から物資集散地としての機能をもつ集落の可能性があります。



中世の道路

⑤朝倉下下経田遺跡 (今治市朝倉下、H19.11～H24.9、37.322m²)

経田遺跡に隣接する弥生時代から中世の集落遺跡で、一般国道196号今治道路建設に伴って調査されました。

弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて堅穴建物47棟が密集した大規模な集落が形成され、集落の縁辺部には笠棺墓が集中する墓域が見つかりました。自然流路には畿内系・山陰系・吉備系・讃岐系など各地の土器を含む大量の土器が入れられており、周囲で土器を使った祭祀が行われたと考えられます。



調査区全景

また古墳時代後期から古代にかけて、堅穴建物のはか70棟の掘立柱建物が密集した集落が広がっていました。

⑥古谷横枕遺跡 (今治市古谷甲、H23.4～H24.3・H24.6～7・H28.11、6,560m²)

一般国道196号今治道路に伴う調査で発見された遺跡で、今治平野南西の丘陵裾近く、多伎川や山口川などによって形成された扇状地の扇尖に立地し、北側には今治平野を見渡すことができます。主として弥生時代中・後期と中世の遺構が見つかりました。



柱穴祭祀



中世の主要遺構

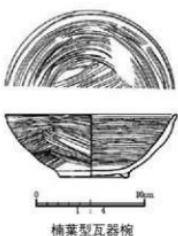
弥生時代中期では掘立柱建物を21棟確認し、そのうち7棟では建物廃絶後に柱穴祭祀を行っています。祭祀には、柱を抜き取った後に土器・躰・穀物や堅果類などを埋納したものや、大型の柱穴(直径1m以上)の掘り方全体に土器と伐採石斧を廃棄した特殊なものがみられました。後期では、焼失した堅穴建物が散在している状況が確認できました。

中世では、13世紀後半を中心に、二面庇を有する大型の掘立柱建物が3棟あり、二重の方形溝を取り巻くように分布しています。これらの遺構を大きく囲む塀などの施設もあることから、通常の集落とは異なる特殊な性格の空間であったと推定されます。

《中予地域》

⑦松環古照遺跡 (松山市南江戸、S60.6 ~ 62.3、16,100m²)

JR 松山駅西側の国道 196 号松山環状線(通称 ライブルク通り)建設に伴う調査で、遺跡は特に南江戸古照地区に集中していました。造構・遺物の中心となる時代は、平安から鎌倉・室町で、特に鎌倉期のものが多数発見されました。



平安時代の遺物では、当時の貴族である摂関家の莊園などでよく出土すると言われている、楠葉型瓦器碗(大阪府枚方市楠葉が生産地)がありました。また、役所や寺院などで使用される縁箱・灰釉陶器も出土しています。

鎌倉時代では掘立柱建物や井戸跡、土壙墓などが確認されました。掘立柱建物は 2 ~ 3 棟が一つのまとまりをもち、半町から一町(約 109m)程度の距離を隔てて建っており、当時の散村の様相がよくわかります。建物の近くには曲物といわれる円形の木製容器を据えた井戸跡も見つかりました。土壙墓は 6 基がまとまっていることから、墓地の様相を呈しています。

特筆すべきは、一辺が半町四方の溝を持つ 14 世紀前後の方形館跡が見つかったことです。この時期に閑東武藏國から江戸氏の西郷御家人として伊予に移住していますので、その屋敷の可能性も考えられます。『子章記』には河野通有と江戸氏の娘の婚姻が記録されています。

その他、遺物では鎌倉時代の日常雑器の和泉型瓦器碗(大阪府南部の和泉地方で生産)が、県内で初めて大量に出土し注目されました。

⑧北井門遺跡 (松山市北井門、H6.4 ~ 8.3、H19.2 ~ 24.3、48,811m²)

国道 33 号線と松山自動車道松山 IC の連絡道、松山空港方面への外環状線建設に伴う発掘調査で、遺跡全体では約 50,000m²近くの大規模な調査を行いました。

縄文時代では、後期末から晩期の竪穴建物や縄文土器の深鉢を使用した土器棺墓が見つかり、縄文時代晩期の竪穴建物では勾玉などの玉造りが行われていたことがわかりました。



前方後方墳

竪穴建物群

また、弥生時代前期の竪穴建物が見つかったほか、200 棟におよぶ竪穴建物が密集する弥生時代後期から古墳時代後期の集落跡を検出した。そのうち、弥生時代後期後半には鍛冶炉を持つ円形の竪穴建物や、祭祀を行なった後に大型器台(表紙写真)などを廃棄した大溝も見つかりました。

古墳時代の方形堅穴建物では、土師器だけを使用する時期から須恵器を使用し始めた時期などがあり、出土遺物も山陰系土師器、市場南組(現在の伊予市)系の初期須恵器や陶質土器など様々なものがあります。一部の堅穴建物では須恵器有蓋杯を使用した建物廃絶に伴う祭祀も確認できました。また、遺跡の東端には古墳時代前期の前方後方墳も築かれています。

縄文時代後期、縄文時代後期末から晩期前葉、弥生時代前期中葉、弥生時代後期後半から古墳時代後期、中世、近世の集落変遷をたどることができる重要な遺跡です。

⑨長田遺跡 (伊予市砥部町原町、S53.6 ~ 11、2500m²)

国道 33 号砥部道路建設の際、砥部川左岸の狭小な河岸段丘上に広がる古墳群の下層から、縄文時代晩期の土壙墓群が見つかった遺跡です。土壙幕は、板と壁面の間に石を詰めた「石詰め式」と壁面に石を積んだ「石積み式」があり、床一面に扁平な青石を敷き詰めたものや石を等間隔に並べたもの、石枕状に扁平な石を置いたものがありました。墓壇内には赤色顔料が残っているものもあり、1・3・4 号墓でサスカイト製石鐵が出土したほか、姫島産の黒曜石やチャートの剥片、縄文時代晩期の土器片などが出土しています。

この土壙墓の形態は、松山平野内で弥生時代前期(西野 III 遺跡、持田町三丁目遺跡 p.18 ㉙)・後期(土壙原 VI 遺跡)にも見られますが、長田遺跡のものが最も古い時期です。



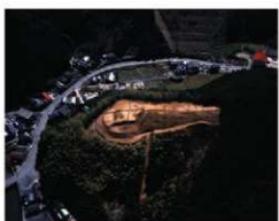
石積み式土壙墓

《南予地域》

⑩長松寺城跡 (宇和島市保田、H178 ~ 182、3,700m²)

宇和島市の郊外、保田地区に所在する友岡附(標高 173 m)からのびる尾根に造られた山城です。長松寺城としては尾根の上位(標高 92 m)に位置する城跡が知られていましたが、国道 56 号宇和島道路建設に伴う調査で尾根の先端部(標高 72 m)から新たに遺構が発見されました。それは 3 箇所の人工的に作られた平坦部(曲輪)と土塁や堀切などです。出土遺物には土師器皿や中国陶器、15 世紀前半頃の備前焼すり鉢などがあります。

尾根の上位に造られた城は、横堀や堅堀といった 16 世紀後半に位置付けられる遺構がありますが、尾根先端部で発見された遺構は、各地域の中世の山城で普遍的に見られるもので、使用された時期も尾根上位のものより約 100 年程度は古いと考えられます。



長松寺城跡遠景

2. 高速道路関連

愛媛県における高速道路建設は、徳島を起点とし大洲市までの四国縦貫道と、川之江ジャンクションから高知を経て愛南町から大洲市のルートを四国横断道として計画されました。

発掘調査は、昭和55年に旧伊予三島市内にある路線内の遺跡から開始され、計画が西へ延伸するのに伴って本格化しました。平成9年には松山ICまで供用を開始し、調査はさらに南方面でも実施され、現在は津島岩松ICまで供用されています。

《東予地域》

⑪ 経ヶ岡古墳 (四国中央市下柏町、S55.6 ~ 58.3、1,200m²)

松山自動車道三島川之江IC内にあった愛媛県内東端の小型前方後円墳(全長30m)です。

地元の言い伝えでは『戦国時代、(徳島の)三好勢が攻め込んできた時、麓にあった寺院の僧侶が経典を隠した』場所で、遺跡台帳も「経ヶ岡遺跡(経塚)」となっていましたが、発掘調査



経ヶ岡古墳 横穴式石室

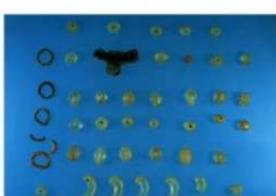
によって段構造を持つ前方後円墳であることがわかりました。後円部には盗掘穴がありましたが、強固な版築のため天井石まで届いていませんでした。北に開口する末盜掘の横穴式石室は、小型石材を積み上げた閉塞部や隔壁を構築した後、扁平な板石を立てて玄門を構築など、石室構造を検討する好資料となっています。

石室内にはf字形鏡板付骨2個体(p.12参照)を含む金属装馬具や金銅製の胡鏡、歩搖を付した冠片などが副葬されていました。須恵器を含む副葬品の配置から古墳

は6世紀初頭に築造され、6世紀後半までに2回の追葬が行われたことがわかりました。北側の墳丘剥離部には須恵器大甕が2個置かれ、そのうちの1個に大型の提瓶が収められていました。さらに前方部には小石棺が造られ、高齢男性が埋葬されていました。近くには陵墓参考地の東宮

山古墳もあり、宇摩平野内の首長墳の系譜を考えるうえで重要な古墳です。

このIC建設では経ヶ岡古墳のある丘陵頂部から派生する稜線でも古墳調査を行い、四ツ手山古墳では、小型石材を使用した西に開口する横穴式石室内から鈴鏡片や雲珠などの金銅装馬具と水晶製玉類(勾玉・切玉・平玉)、石室側壁裏側からは挂甲小札、墳丘上からは鶲・鹿形埴輪が出土し、藤谷池東古墳では、大型板石を使用した箱形石棺が発見されました。



四ツ手山古墳出土の装身具と鏡片

⑫ 平坂Ⅱ遺跡 (四国中央市土居町中村、S63.6~10、2,500m²)

いりや
入野バーキングエリア(PA)近くの遺跡で、法皇山脈の北斜面が河川の浸食により開析されて残った尾根(標高100~120m)の先端部に位置します。約50m四方の狭く傾斜のきつい空間に弥生時代中期後半の堅穴建物や土塁、溝状構造などが見つかりました。近隣の丘陵部(標高100m前後)にも同時期の遺跡が発見されており、漸戸内海南岸の弥生時代中期後半から後期初頭の時期に見られる典型的な丘陵上の集落だと言えます。



平板 II 遷跡全量

丘陵からの眺望は極めて良好で遠瀬が一望に見渡せ、丘陵の東西は深い谷となっており、行き来には不便な場所に立地しています。低地の集落と変わらない出土遺物や遺構から、谷水田や畠作など、複合的な生業に従事した「山住みの集落」と考えられます。

(13) 半田山遺跡 (西条市飯岡、S62.4～H1.10、47,000m²)

西条ICが建設された場所で、西条平野を望む古期扇状地が開析されて残った段丘上に位置します。標高は約120mで段丘の裾部と70mの高低差があります。平坂II遺跡よりは広い空間を持ち、3年における調査の結果、弥生時代中期後半から後期の堅穴建物19棟（そのうち1棟は、西予市にある愛媛県歴史文化博物館に実物大復元）、掘立柱建物55棟などが見つかりました。掘立柱建物はしっかりとした4本の柱で建てられており、高床食



4 杣柱の据立柱建物群

当遺跡の直下の平野部で見つかった池の内遺跡(p.5②)もほぼ同時代の遺跡で、低地の農耕集落と山住みの集落が連動して農耕社会を形成していたことがわかりました。

《中子地域》

⑯森松遺跡（松山市森松、H5.12～6.2、5,000m²）

川内方面から松山ICへ入る直前にある森松遺跡は、重信川の北岸を流れる支流の内川南岸で、この周辺は沖積低地堆積物に覆われた肥沃な土壤が広がる地域です。ここでは5世紀前半頃に形成された水田跡が確認され、古墳時代の食料生産を知ることのできる遺跡となりました。



水田遺構

確認された水田耕作面は東から西に向かって下る緩傾斜地に作られ、その平面形は蜘蛛の巣状となっています。水田の各所には取水口で連結された部分があり、標高の高い水田面から低い水田面へと灌水が行われていたことがわかりました。

自然流路には、護岸工事の痕跡である堤防状造構が残されており、水田跡の周辺では湿地などに多く生息するヤナギ属の植物遺存体も確認されました。水田面から検出された植物珪酸体は密度が低いことから、稲作期間が短かったと考えられます。

このように開発の困難な湿地の周辺に水田が形成された背景には、古墳時代になってからの大規模で精度の高い土木工事の技術の存在があると言えるでしょう。

⑯ 猿ヶ谷2号墳 (伊予市上三谷、H5.7~8、1,350m²)



金銅装f字形鏡板付轡

松山自動車道から伊予灘を望む松山平野南部の丘陵地帯に造られた横穴式石室を内部主体とする全長39mの前方後円墳です。石室内からは金銅装f字形鏡板付轡、太刀類、鉄鎌、装身具とともに、6世紀中頃から7世紀初頭の須恵器が出土しています。金銅装馬具や金装太刀の出土は、被葬者が地域首長であったことを示し、「伊予國造」の成立を考える貴重な遺跡です。後円部盛土内からは古墳時代前期の壺棺や明確な時期判断のできない箱形石棺も見つかりました。盛り土からは陶製算盤玉形軒轎車や小型丸底壺・小型器台などのほか、5世紀前半の陶質土器や埴輪片が出土し、猿ヶ谷2号墳が造られる前に初期須恵器を使用した渡来系の人を葬った施設があったことが考えられます。

⑰ 東峰遺跡・高見I遺跡 (伊予市双海町上灘、H7.5~8.3、9,200m²)(H29.1~6、4,676m²)

黒岩岳トンネル手前の東峰遺跡と高見I遺跡は、中央構造線のやや南、肱川の支流である中山川の最上流域にあたる独立丘陵上に位置します。

東峰遺跡では、約30,000年前の姶良Tn火山灰(AT)の降下以前、後期旧石器時代前半期に位置付けられる台形様石器・局部磨製石斧が出土しました。これらは現在四国で最も古い石器の確認例です。

谷を隔てた南西側の丘陵に位置する高見I遺跡では、後期旧石器時代の多くの石器集中域(ブロック)や、火を使った痕跡である礫群のほか、縄文時代早期の無文土器や山形押型文土器などが出土し、狩猟用の落とし穴なども確認されました。石器に使用した石材を見ると赤色珪質岩、



遺跡遠景



AT下位石器群

安山岩、砂岩、サヌカイト、姫島産黒曜石、緑泥片岩などがありますが、なかでも内子町五十崎に位置する神南山とその周辺から産出する赤色珪質岩が最も多く使用されており、約25km離れた肱川流域まで、東峰遺跡・高見I遺跡を造った人々の行動範囲であったことが推測されます。

《南予地域》

⑯水戸森遺跡 (内子町水戸森、H7.8～8.1、6,800m²)

内子PA近くの水戸森遺跡は、愛媛県南部を流れる肱川の支流・中山川流域にあり、周囲には丘陵および河岸段丘が発達しています。発掘調査では354点の石器が出土し、これらは出土層位と遺物の内容から、ナイフ形石器文化後半期のもの(約2万年前)と位置付けられます。また、発見された石器類には20例の接合資料が認められ、原石を入手してから石器製作に至る工程を垣間見ることができます。瀬戸内地域に多く認められる、小ぶりな棺先などを作る技術であることがわかりました。



遺跡遠景

これらの石器は、ブロックと呼ばれる多くの石器がまとった状態で発見されており、本調査ではこのまとまりが2箇所で認めされました。使用されていた石材は、主に赤色珪質岩と呼ばれるチャート質の石材で、水戸森遺跡から約6km南西にある神南山の周辺で産出するものです。本地域を含めた肱川中流域では、水戸森遺跡と同じく後期旧石器時代の遺跡が集中して確認されていますが、やはり赤色珪質岩を主要石材とした石器群の検出が顕著です。周辺においては弥生時代に至るまでこの石材が使用されており、地域における伝統石材として古くから人々の生活を支えた資源であることがわかります。

⑰大洲元城跡 (大洲市新谷、H11.3～7、3,900m²)

大洲IC手前の山口トンネルを抜けた左側の斜面と、その上標高125mの平坦部に城跡があります。縄張り調査では、人工的に造り出した平坦部(曲輪)、背後に連なる山との間の二重の堀切、平坦部の下の横堀、さらにその下の斜面部には14本の堅堀(連続堅堀という)が見られました。



元城跡遠景

今回の調査で、そのうち5本の堅堀と横堀、横堀を掘つた土を盛りあげたと考えられる土壘状の高まりや、平坦部と堀切の一部が発掘されました。出土遺物には16世紀の中国陶磁器や備前焼の大甕などがあります。

大洲を含めた南予地域は戦国期に幾多の戦乱に巻き込まれた歴史を持ちます。特に土佐の長宗我部元親は予土国境の城を次々と落とし、大洲へも侵攻してきます。それを迎え討ったのが河野氏と毛利氏の連合軍です。大洲元城の構造は、横堀と連続堅堀がセットである点や、背後の山との分断に二重の堀切を持つなど、地元の山城にはない技術が導入されており、長宗我部氏の城造りと強い共通性がうかがわれます。しかし、毛利氏も同じような城造りを行っていますので、誰が築城したかについては文献史料の解釈も含めて慎重な判断が必要でしょう。

いわくらじょうあと
⑯岩倉城跡 (宇和島市三間町曾根、H17.4 ~ 10、H20.10 ~ 12、H21.12、9,050m²)



岩倉城跡遠景

宇和から三間にに入った三間川沿いのルートを挟む東西の山間には、中世の山城が多数造られています。岩倉城の構造は三間盆地を臨む丘陵の頂部に東西方向の大きな曲輪を設け、そこから尾根筋を削平した南北にのびる細長い曲輪を配しています。発掘調査は城の南裾部に位置する最も低位の丘陵上で行われ、尾根状にのびた地形を段状に削平して4箇所の曲輪を造り出し、各曲輪の背後は切岸としてきつい傾斜がつけられていました。曲輪の平坦面には非常に多数の柱跡が見られ、掘立柱建物として復元できたものもあります。

出土遺物は14世紀後半から15世紀後半の時期の中国陶磁器や備前焼などですが、16世紀後半のものもありました。

遺構の残り具合が良好なこともあり、道路設計がオープンカット工法から、トンネルに変更された珍しいケースです。

3. 本四架橋（しまなみ海道）関連

県教育委員会実施の発掘調査を引き継ぎ、昭和53年度の伯方島叶浦遺跡群から事業を開始しました。しまなみ海道開通に向け多くの島々で発掘調査を行い、中には見近島城跡のような無人島での調査もあり、発掘資材運搬のためフェリーをチャーター、発掘調査要員も毎日チャーター船で島に渡るなど、連絡橋建設事業ならではのものでした。

たなびき
㉐多々羅遺跡 (今治市上浦町甘崎、H4.7 ~ H5.1、2,800m²)



多々羅遺跡遠景

多々羅遺跡は芸予諸島を構成する大三島の東側海浜部に位置し、遺跡からは生口島（広島県）を目の前に望むことができます。平成4年度に行われた発掘調査は、土器製塩の遺構が確認された愛媛県内で初めての事例となりました。

汀線に接する砂堆上には古墳時代前期の製塩炉2基が形成され、その周囲には炭化物や焼土によって足元を固めた作業面や大量の土器製塩の工程を具体的に復元することができました。また、古墳時代前期は芸予諸島を中心とした島嶼部や沿岸部における製塩土器の出土遺跡が激増し、各地での盛んな土器製塩が推測されますが、多々羅遺跡はその製塩の実態を把握することができる遺跡といえます。



2号製塩炉遺物出土状況

みちかじまじょうあと
②見近島城跡（今治市宮窪町、S55.8～56.6、6,000m²）

伯方大島大橋の橋梁工事に先立って調査を行い、島の北西側にある入江の奥の緩い斜面に18棟の長方形状をした居住域が見つかりました。

遺物は非常に多種多量のものが出土しています。備前焼の大壺やすり鉢、天目茶碗などの国産陶器類のほか、青磁・白磁・青花などの中国陶器、朝鮮半島産の象嵌青磁など貿易陶器が多いことが特色です。また、107枚の錢貨、鐵鏃や小札などの武器・武具、硯・茶臼なども出土しています。時期は15～16世紀中心です。

小さな島にも関わらず、豊富な遺物の出土は南方1.5kmの位置にある国史跡能島城跡と無関係とは考えられず、能島を本拠とした村上上海賊衆の活発な交易活動の一端を表すものとして注目されます。



見近島城跡遠景



青磁各種

いとおおおに
②糸大谷遺跡（今治市砂町町、H1.6～2.3、H6.4～7.8、10,060m²）

来島大橋の四国島側の橋脚設置箇所の来島海峡に面した谷間にある遺跡で、サスカイト(香川県金山産)の重さ3kgを超す大型の石器素材の出土から、縄文時代後期の交易活動をうかがうことができます。弥生時代前期の土器棺や中期後半の土器群も見つかり、弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭には、畿内・山陰の土器の出土や擦り石に付着した水銀朱によって、広い交易活動があったことがわかります。古墳時代後期終末には堅穴建物の半農半漁集落が成立し、谷奥には副葬品を持つ小型石室の方墳と素掘りの簡素な墓という小集団の長と構成員の墓域がつくられていました。



来島海峡から見た糸大谷遺跡

平安時代中期以降は掘立柱建物の集落で活発な漁撈活動を示す大量の土錘、須恵器・土師器や官的な関わりが想定できる縁袖・灰釉陶器、青磁などの出土から、有力寺社などの莊園の一部の可能性も指摘されています。

遺物には農耕、紡織、編み物、漁業、製塩、鍛冶関連の資料がみられ、海浜集落の様相を検討するうえで重要な遺跡です。

あがた
③阿方遺跡（今治市阿方、H7.8～10.5、2,000m²）

架橋ルートが県史跡阿方貝塚を横切るため調査が必要となり、橋梁の橋脚部のみを発掘しました。その結果、貝塚を形成した集落の縁辺部に広がる河川とその水際・岸辺の緩斜面などから縄文時代晚期から弥生時代中期と古墳時代後期の遺構・遺物を確認しています。



木極状遺構



阿方式土器

発掘調査が行われた箇所は低湿地に当たり、木製品や有機質遺物がよく保存された状態で発見されました。遺構では、自然流路に接した護岸施設(杭列)や流路内に設置された堅果類の晒し場・導水施設とみられる木構状遺構などが確認できました。また周囲からは鉢や鑓などの農耕土木具をはじめとして、黒色塗漆木製短中、赤漆塗飾や簪・編み籠、獸骨・魚骨や種子類など、多彩な有機質遺物が出土しました。他にも磨製石斧、打製石剣・石鎌、分銅形土製品、土製紡錘車、骨角器類など多様な遺物が得られています。

河岸の緩斜面では、継続的に廃棄された弥生時代前期前半から中期初頭の土器が大量に出土しました。特に前期末から中期初頭の土器は「阿方式土器」と呼ばれ、大きく開く口縁部の内面や胴上半部に過度の装飾を施した壺や、短く水平に開く口縁部を持つ甕に特徴があります。

その様相を詳細に検討することができたことも、大きな

調査成果です。

阿方遺跡の南側には矢田八反坪遺跡があり、同様に縄文時代晩期から古墳時代までの遺構・遺物が見つかり、出土した木製品の中には整竿・弓などもありました。

4. 今治新都市開発関連

地域振興整備公団は、架橋効果を地元に波及させるため、今治平野北西部の阿方・高地地区と、今治ICの南側にあたる矢田・別名・高橋地区の丘陵部の広大な土地に、愛媛県と今治市と三者による今治新都市開発整備事業を計画し、平成14年から17年まで発掘調査が行われました。

⑫阿方牛ノ江遺跡群 (今治市阿方、H14.4~15.2、16700m²)

低丘陵に挟まれた南に開口する谷間の遺跡群で、6世紀に谷開口部の牛ノ江I・II遺跡に集落が営まれ、7世紀には谷奥に移動、8世紀には再び谷開口部に移動し、14世紀まで存続する集落

の変遷がわかります。古墳時代後期から古代の堅穴建物や掘立柱建物からは、土師器や須恵器とともに赤色塗彩土師器・黒色土器・綠釉陶器・灰釉陶器・墨書き土器・用硯などが出土しています。

すぐ隣には綠釉陶器・灰釉陶器が大量に出土した阿方春岡遺跡(一般的には綠釉陶器の方が多く出土するが、灰釉陶器の方が多い県内唯一の遺跡)もあり、国衛関連の官人層の存在をうかがわせる集落です。



阿方牛ノ江・高地地区遺跡群

⑬別名遺跡群 (今治市矢田・別名、H14.2 ~ 15.11、H16.10 ~ 17.11、13,000m²)

起伏の小さな丘陵部の上や南東に開口する谷間に広がる遺跡群です。寺谷I遺跡では壁の表現を持つ窓櫛造平地式住居と切妻造高床建物を高杯脚部に描いた弥生時代の絵画土器が出土したほか、規則性を持って配置された9~10世紀



鍛冶工房跡



銅印

の鍛冶工房群が発見され、官衙関連の

鍛冶工房であったと考えられます。また、端谷I遺跡では8~9世紀の鍛冶工房が見つかり、銅印「倉正私印」も出土しました。

15~16世紀の成ルノ谷遺跡では、鍛冶炉だけでなく、約50m×30mの方形に区画された溝の中に掘立柱建物や屋敷幕も見つかっています。

5. 愛媛県関連

愛媛県が県内各地で計画した県道拡幅や河川改修、学校校舎の建替えなどの公共事業に関連して、事前の発掘調査を実施してきました。

その他に松山周辺では、総合運動公園、とべ動物園、こどもの城の整備、県民文化会館や総合社会福祉会館、県美術館などの建物新設、さらにJR車両基地の移設も伴う調査も行いました。

《東予地域》

⑭本郷遺跡 (新居浜市本郷、H21.8 ~ 9、360m²)

県道西町中村線整備事業に伴う調査で、遺跡は大生院台地の東を北流する東川が形成した扇状地の緩傾斜面に位置します。見つかったものの大半は奈良時代末から平安時代に属する遺構・遺物です。8世紀後半から10世紀にかけての掘立柱建物4棟と、骨片や焼土を含み、骸骨器を埋納していた可能性の考えられる土坑などがありました。赤色塗彩土器や灰釉・綠釉陶器など、寺院や官的な施設を特徴づける遺物が出土していることから、役所や官人層の居宅があった可能性が考えられるでしょう。



掘立柱建物跡

⑮長網遺跡 (西条市実報寺、H12.11 ~ 14.3、4,180m²)

県道東予玉川線整備事業に伴う調査で、遺跡は大明神川左岸の微高地上に広がりをみせます。繩文時代後期から中世にかけての遺構・遺物が見られますが、特に古墳時代後期から奈良時代(6世紀後半から8世紀前半)が中心になります。



長網遺跡の大溝

古墳時代の堅穴建物が多数確認されていますが、7世紀前半には全て廃絶しています。そして、8世紀前後の軒瓦を含む瓦が列をなして大量に出土しています。さらに7世紀後半に掘削され、8世紀前半には埋め戻されたとみられる幅4.5m、深さ1.4mの大溝なども見つかっています。この溝は規模が大きいことや、比較的短期間の使用と考えられることなどから、「伊予の總領」と呼ばれる地方官に関連する施設の可能性も考えられます。

㉙辻堂遺跡（今治市辻堂、H124～6、270m²）



縄文土器出土状況

県道桜井山線改良工事に伴う調査で、遺跡は今治平野のほぼ中央部の、標高5.5mの微高地上に位置します。遺構の中心は縄文時代後期・晚期で、柱穴や土坑などが確認されました。特に縄文時代後期の土器片は大量に出土しており、中でも後期前半の土器は文様を持つ大形破片が多く、今治平野の中でもまとまりのある良好な資料です。土器を形成する胎土には、今治では産出しない結晶片岩が含まれているものがあり、これらはいわゆる「二波川帯」といわれる地質帶の岩石です。西条や新居浜などでもよく見られることから、それらを含む土器が今治に持ち込まれたことを示しています。

《中予地域》

㉚持田町三丁目遺跡（松山市持田町、H5.8～10、1,500m²）

持田町三丁目遺跡は松山平野の石手川北岸に位置しています。微高地上の緩やかな斜面に弥生

時代前期の集団墓地が築かれており、墓域は木棺墓や土器棺墓30基以上の埋葬施設からなります。埋葬施設の方位や配置状況にはいくつかの規則性が認められることから、墓域は複数のグループによる共同墓地と推測されます。一部の木棺墓には弥生土器小壺、碧玉製管玉、磨製石劍といった副葬品が伴い、弥生土器小壺は基本的に被葬者の頭部付近に置かれていたようです。

弥生時代前期に瀬戸内海沿岸には持田町三丁目遺跡のような集団墓地の遺跡が点在し、こうした集団墓地の由来は九州に求められます。持田町三丁目遺跡は、弥生時代前期に瀬戸内海沿岸に伝わった埋葬習俗の状況を明らかにできる遺跡といえます。



弥生時代前期の壺・石劍・管玉

ゆづきじょうあと
⑩湯築城跡 (松山市道後公園, S63 ~ H1, 6,700m², H3 ~ 6, 9,800m²) (試掘:H7, 补足:H10 ~ 13, 4,258m²)

湯築城跡は、中央の丘陵を二重の堀と土塁が取り巻く平山城です。文献の初見は南北朝期で、室町時代以降、守護河野氏が居城としました。

調査の結果、外堀土塁の裾を巡る道路や排水溝、土塁と礎石建物跡など、整然とした遺構が発見され、小区画に分かれた家臣団居住区と、池泉庭園を伴う庭園区、広い空間を利用した上級武士居住区の存在が明らかとなりました。西口では新旧2つの四脚門が発見され、掲手門と考えられています。幅20m、高さ5mの巨大な外堀土塁は、堀を掘った土をかき上げながら構築しています。遺物からみて、外堀が掘られた時期が16世紀前半と推定でき、文献研究によって天文4(1535)年にその工事が行われたことが特定されました。丘陵部では、外堀が掘られる前の礎石建物が見つかり、湯築城の変遷を考え上で重要な情報が得られています。

出土遺物は25万点におよび、素焼きの土器や備前焼、中国陶磁器などを使用した城内の生活のようすが明らかになりました。また、湯築城跡西側の県道拡幅に伴って道後町遺跡が調査され、城下の様子も明らかになってきています。

日本庭園開発に伴う緊急調査でしたが、遺跡の価値が高く、保存を前提に調査が実施され、平成14年に国史跡に指定され、発掘成果をもとに復元整備が行われました。



湯築城跡全景



武家屋敷の出土遺物

⑪宮前川遺跡 (松山市別府町, S58.2 ~ 59.3, 5,546m²)

宮前川改修事業に伴う調査で、宮前川放水路に接続する下流部に広がる遺跡です。大峰ヶ台と弁天山の丘陵に挟まれた低地にあり、弥生時代前期・中期の弥生土器も出土していますが、中心となるのは弥生時代終末の土器群と古墳時代初頭の山陰や吉備・畿内から持ち込まれた大量の古式土師器です。県内では珍しい山陰系瓶形土器は、把手部などに残る痕跡から吊り下げて使用したことが推察できます。

遺跡内の桶の巨木(幹の直径2m)周辺からも木製品(板材や杭)と古式土師器が出土しています。また、土製勾玉や乳房を持つ動物形土製品、小型粗製土器、卜骨などの遺物が多く出土していることから、桶の周囲で祭祀が行われたと考えられます。



山陰系瓶形土器

②松山城三の丸武家屋敷群—県民館跡地

(松山市堀之内、H8.11～9.3、4,000m²)



調査区全貌

県美術館建設に伴う調査で、江戸期の4時期の屋敷割りの変遷や下層に広がる中世水田を検出しました。出土資料に「戸田」の記名のあるものがあり、「松山城下嘉永図」の「戸田傳衛門 350石」屋敷と一致し、堀之内に広がる武家屋敷や道路などの形状が絵図と合うこともわかりました。

人々や動物を型取ったものや鎧・土笛・泥面人、鍋・釜・急須などの日用雑器を模した土製品、茅葺き屋根の農家や城郭などの盆景・箱庭に使った小物など武家屋敷内の生活を想像することのできる資料も多く見つかっています。中には徳川家の使用した「三つ葉葵紋」の軒丸瓦もあります。

③上三谷篠田・鶴吉遺跡

(伊予市上三谷・松前町鶴吉、H24.4～26.2、22,619m²)



古墳時代の集落

伊予市上三谷から松前町鶴吉にかけて広がる遺跡で、大谷川および長尾谷川に挟まれた沖積低地に立地しています。JR車両基地の移転整備に先立って、平成23年から行われた4カ年に渡る調査で、縄文時代晚期から中世にかけて営まれた集落跡を確認しました。

なかでも、古墳時代では竪穴建物73棟・掘立柱建物70棟をはじめとして多数の遺構が確認され、重信川以南では最大規模となる古墳時代集落の存在が明らかになりました。

これらは主に古墳時代中期から終末期にかけてのもので、時期ごとの集落の変遷を読み取ることのできる良好な資料であり、周辺に所在する上三谷古墳群や狼ヶ谷古墳群との深いつながりも想定されます。

また、弥生時代の磨製石剣、山陰系土器、古墳時代の市場南組系須恵器、韓式系軟質土器などの渡来系遺物、机などの調度品や木製埴輪の可能性をもつ埴丘祭祀具・威儀器などの木製品類、子持勾玉などの石製模造品等、特筆すべき遺物が数多くみられ、当地における中心的な集落であることを示す一方、他地域との関係性を考えるうえでも非常に注目される遺跡です。

《南予地域》

④犬除遺跡

(宇和島市津島町御内、H8.11～9.3、2,000m²)

県道宿毛津島線改良事業に伴う調査で、旧津島町内陸部の御檉盆地にある河岸段丘上に位置します。縄文時代早期～後期の遺構・遺物が出土しており、特に後期中葉が充実しています。また、各種の石器やその素材の原石などが豊富です。



縄文時代後期の配石墓

遺構では西南四国では初めて縄文後期の配石墓(土坑の縁に石を配列した墓)が見つかりました。さらに鬼界アカホヤ火山灰(6,300年前噴出)も明確に認められ、この層の下から早期土器、上から前期土器が出土しており、およその土器年代を知る手掛かりになりました。

6. 園場整備関連

今治市朝倉地区と伊予市上三谷地区で県営園場整備事業(緊急農地整備事業)に伴う発掘調査を実施しました。平成30年度からは、西条市道前平野地区での国営農地再編整備事業に伴う発掘調査を行っています。

⑬ 伊予市上三谷古墳群 (伊予市上三谷 S605～8, S615～7, 3,250m²)

扇状地に構築された8基の古墳を調査し、3号墳は「遊塚古墳」の別称をもつ6世紀後葉の全長30m程度の前方後円墳、1号墳も「塙塚古墳」の別称をもつ7世紀初頭の29×22mの方墳で、彷彿四神四獸鏡や圭頭太刀が副葬されていました。

古墳群南の丘陵上にも前方後円墳で構成される首長墓群があります。



上三谷 3号墳

7. 民間開発関連

公共事業に伴う調査ばかりでなく、四国電力の鉄塔建設に伴う遺跡(西条市八堂山遺跡)の調査や、ゴルフ場開発に伴う古墳群(北条小山田古墳群)の調査、大型商業施設建設に伴う調査(p.5 ②池の内遺跡)などにも対応しました。

⑭ 北条小山田古墳群 (松山市才之原、S63.9～H1.4、4,000m²)

北条平野北端の立岩川に流れ込む萩原川の両側の丘陵に古墳が造られています。調査は民間企業のゴルフ場建設に先立って実施され、横穴式石室を持つ古墳7基と箱式石棺墓1基、弥生時代中期の遺跡1箇所が発掘されました。

古墳は、丘陵の頂部や尾根上と、尾根の斜面部や先端部に造られています。方墳と円墳があり、石室の規模は、長さが6m前後、幅は奥壁側で2mまでのものがほとんどです。それぞれの古墳は6世紀後半から末に造られたものと、6世紀末から7世紀初頭の時期に造られたものがあります。また、7世紀前半階までは追葬が行われていたこともわかりました。

箱式石棺墓には、1体の人骨がほぼ完全な状態で残っており、骨の分析から、身長151cm程度の20歳以上の成人男性と推定されました。

弥生時代の遺跡からは、県内でも珍しい鉄製の鉈も出土しています。



小山田 5号墳

8. 現在整理作業中の遺跡

近年、今治道路や国営圃場整備に伴って、大型の発掘調査が続いています。現在整理作業中のそれらの遺跡のうち、代表的なものを紹介します。

⑦北竹ノ下 I・II 遺跡 (西条市石延・安用、H30.10 ~ R5.3、17,013m²)



押型文土器の出土

西条市安用・石延・広岡に所在する遺跡で、道前平野北西部に形成された新川扇状地の緩斜面上に立地しています。国営道前平野農地整備事業の実施に先立って、平成30年から行われた5カ年に渡る調査で、縄文時代早期から近世初頭にかけて営まれた集落跡を確認しました。

縄文時代では早期押型文土器がまとまって出土しました。確認された押型文土器群は県内でも最大規模のもので、当時の生活の様子や文物の移動を検討するうえで非常に有用な資料といえます。

弥生時代後期から古墳時代初頭の時期には、堅穴建物46棟からなる集落跡とその隣接地に営まれた水田跡を確認しました。集落内ではこのほか、鍛冶関連遺構や多数の土器棺墓なども見つかっており、人々が当地で行った居住・生産・埋葬といった多彩な営みの一端を垣間見ることのできる良好な資料が得られています。

また、中世では国内で初例となる
と中国の龍泉窯青磁筆架の出土が注



密集する堅穴建物跡



水田跡



青磁筆架

目されます。筆架の存在はこの遺跡に居住した身分の高い武家や僧の存在を示すもので、その保有から廃棄に至る歴史的な背景の追求が今後の課題といえます。

⑧新谷森ノ前遺跡 2次 (今治市新谷、H24.4 ~ 30.5、75,060m²)



絵画土器

自然流路から出土した土器

新谷森ノ前遺跡は、今治平野南西部に位置し、今治道路のIC予定地付近に広がる遺跡です。2次調査地は谷底平野から段丘にかけての範囲で、居住に関連する遺構は谷底平野内の微高地と段丘間に形成され、微高地・段丘間の凹地には自然流路が流れています。

主要な時期は弥生時代中期中葉～後期前半と8～9世紀です。

主に谷底平野の微高地上に展開する堅穴建物は弥生時代後期前半を中心とし、うち1棟には鐵治造構を伴っています。また、龍や船を描いた同時期の絵画土器が数点出土しています。自然流路には弥生時代中期中葉～後葉の弥生土器や木製品が多量に含まれており、これらの一部は調査地外の段丘上に推定される集落に由来するとみられます。

8～9世紀の掘立柱建物群は微高地または段丘上に築かれています。掘立柱建物の主軸方向は正方位や今治平野条里地割方向など複数認められるため、数回にわたって建て替えられていると考えられます。主軸方向を同一とする建物群の一部はある程度の規格性をもって配置されています。小片ではあるものの一定数出土している瓦からは、建物群の一部が瓦葺であったと推測されます。



古代の建物群

㊯新谷古新谷遺跡 2次 (今治市新谷、H27.12～R23、38,890m²)

遺跡は今治平野南西部の丘陵裾に位置し、ヤツデ状に伸びる丘陵部と谷部を横断して広がっています。一般国道196号今治道路建設に伴い発掘調査が行われ、弥生時代後期から古墳時代後期の集落遺跡と古墳時代中期の群集墳が確認されました。

丘陵部および丘陵裾部から平野部へと続く緩傾斜地に弥生時代後期後半と古墳時代後期の集落が形成され、100棟を超える堅穴建物が確認されています。谷部は幅約30m、深さ約4mにおよび、下層(III・IV層)から弥生時代後期後半の弧帶文を描いた壺や大型器台など祭祀土器を含む多量の土器が出土しました。中層(II層)からは古墳時代の土器や木製品(琴・鍤・櫛・杵・建築部材)、上層(II層上層)から「凡直」刻書須恵器や皇朝十二錢の長年大宝が出土しています。



谷から出土した土器



弧帶文を描いた壺

古墳時代中期の古墳群は、標高約45mの丘陵尾根上に円墳が7基連続して築造されていました。古墳の規模は10数m前後で、いずれも時期は5世紀後半と考えられます。6号墳では堅穴系の墓坑から須恵器杯・蓋・ハソウ・壺・高杯と刀子や鎌などの鉄製品のかガラス小玉などの副葬品が出土しました。



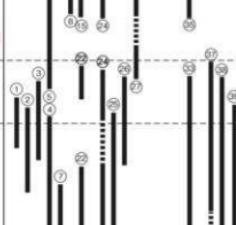
丘陵部の調査区全景



「凡直」刻書須恵器

IV 遺跡年表

年代	時期区分	主なできごと(赤字は伊予関連)	紹介遺跡の消長
3万年前	旧石器時代	前期	
		中期	
		後期	<ul style="list-style-type: none"> ナイフ形石器の出現 ・姶良カルデラの噴火(姶良Tn火山灰の降下)
B.C.13000 (15000年前)	縄文時代	草創期	 <p>ナイフ形石器(⑪高見I遺跡)</p>
B.C.9500 (11500年前)		早期	<ul style="list-style-type: none"> 土器の使用が始まる ・上黒岩岩陰道路で日本最古の土器出土 ・北竹ノ下I-II遺跡で押型土器出土
B.C.5000 (7000年前)		前期	<ul style="list-style-type: none"> ・上黒岩岩陰道路で日本最古の埋葬犬出土 ・鬼界カルデラ噴火(アカホヤ火山灰降下) ・気候温暖化で海面上昇(縄文海進)
B.C.3000 (5000年前)		中期	<ul style="list-style-type: none"> ・栗の栽培
B.C.2000 (4000年前)		後期	<ul style="list-style-type: none"> ・縄文小海退(海水面後退) ・畑作の始まり ・大陰道路の配石墓
B.C.1000 (3000年前)		晩期	<ul style="list-style-type: none"> ・北九州に稻作が伝わる ・大洞遺跡で朝鮮半島系の彩文土器出土 ・特高町三丁目遺跡で集団墓形成 ・岩崎遺跡で環濠集落形成 ・金属器が大陸から伝わる ・大久保遺跡で鉄製斧破片出土
B.C.600 (2600年前)		前期	 <p>阿方式土器 (②阿方遺跡)</p>
B.C.400 (2400年前)	弥生時代	中期	<ul style="list-style-type: none"> ・文京遺跡が巣点集落化 ・高地性集落が増加する
		後期	<ul style="list-style-type: none"> ・新谷森ノ前遺跡で鉄器生産 ・倭国大乱が起きる ・卑弥呼が邪馬台国の女王となる
200			<ul style="list-style-type: none"> ・前方後円墳の出現・大久保1号墳築造 ・博味吹反地遺跡で首長居館出現 ・多く羅道跡で陶の生産 ・妙見山I号墳築造 ・相の谷1号墳築造
300	古墳時代	前期	<ul style="list-style-type: none"> ・横穴式石室が造られ始める ・須恵器の生産が始まる ・市場南相家跡で須恵器生産
		中期	 <p>市場南相家跡須恵器高杯 (③上三谷墓田・鶴吉遺跡)</p>
		後期	<ul style="list-style-type: none"> ・日本最大の前方後円墳(大仙陵古墳)築造 ・仏教伝来・葉足池古墳築造・群集墳築造 ・聖徳太子伊予温泉へ来湯の伝承(縄文伝わる)

年代	時期区分	主なできごと(赤字は伊予関連)	紹介遺跡の消長
600	飛鳥時代	聖德太子十才寧法制定(604年) 第一回遣唐使派遣(630年)・宇摩向山古墳建造 大化の改新(645年)・法安寺創建 青明天皇行幸(661年)・永納山城築造・南海道の整備 久米官衙開設説成る	
700	奈良時代	大宝律令制定(701年) 平城宮遷都(710年) 国府や国分寺・国分尼寺の設置(伊予国分寺創建) 集里制行われる・高橋佐夜ノ谷道跡に製鉄炉造られる	
800		天台宗や真言宗が開かれる 藤原氏による摂關政治の始まり 遣唐使を廃す(894年)	
900		菅原道真・太宰府に左遷(901年) 平将門の乱や藤原純友の乱起ころ(939年)	
1000	平安時代	摂關政治の終わり 白河上皇が院政を開始する	
1100		奈良原神社絆塚など各地で經塚が造られる 平清盛が太政大臣となる(1167年) 源平争乱・勃発・河野通信の活躍 古照遺跡・八町遺跡など集落遺跡の鎮在化	
1200	鎌倉時代	承久の乱勃発(1221年) 河野氏没落 元寇の役(1274年-1281年)で河野通有が活躍 旧等妙寺開山	
1300		後醍醐天皇の御算計画露見(正中の変 1324年) 今治に五輪塔・宝鏡印塔などが多数造られる	
1400	南北朝時代 室町時代	足利尊氏が征夷大將軍となる(1338年) 濑賀城文獻で初出(1342年頃) 日明貿易の開始(1401年)	
1500		応仁の乱始まる(1467年) 濑賀城の外堀・土壘が築かれる 美島の合戦(1555年)・村上海賊衆活躍(④瀬賀城跡)	
1600	安土桃山時代	秀吉が閻白(レ)就任・瀬賀城を明け渡す(1585年) 龍巣城陥城(1589年) 関ヶ原の戦い・半和島城完成(1601年) 徳川家康が江戸幕府を開く・松山城本丸完成(1605年) 河内森城陥城(1615年) 鎮国令の完成(1641年)	
1700	江戸時代	享保の改革(1716年) 茶部屋の役成始まる 宽政の改革(1787年)	
1800		天保の改革(1830年) 大政奉還(1867年) 麻藩置県(1871年)	
1900	近・現代		

V 発掘調査・整理作業の流れ

発掘調査

調査計画

道路などの建設に先立って、開発の範囲内に遺跡が存在するのかが確認され、遺跡が破壊されることになると記録保存のための発掘調査が計画されます。

発掘準備

発掘資材や発掘現場事務所など、調査の準備を進め、測量に必要な基準点を設置したり、必要に応じて地形測量を行います。

調査開始

重機掘削



重機掘削

遺構検出



遺構の検出・掘削は
作業員による手作業です

遺構掘削
遺物検出



遺構検出

記録
図面作成
写真撮影



遺構や遺物は測量や写真で記録します

航空写真撮影
自然科学分析
専門家の招聘



遺物検出



航空写真では広範囲の撮影を行います

完掘



完掘

調査終了



発掘調査の途中で、地元の方などに
遺跡を公開する現地説明会を行います

整理作業

発掘調査の後に整理作業を行い、その成果は発掘調査報告書として刊行します。



VI 普及啓発活動

センターでは、県内で実施した発掘調査を元に、その成果や遺跡の魅力を広く県民に普及する活動を行っています。

1. 展示会の開催

発足当初から平成 16 年度まで、松山市堀之内にあった愛媛県立歴史民俗資料館との共催で、遺跡出土資料展を開催するとともに、佐原眞氏や森浩一氏など、著名な考古学者を招いて講演会を行いました。



しまなみ海道遺跡展

市町との共催では、昭和 59 年度と平成 10 年度に、砥部町中央公民館にて出土資料展示および発掘報告会を開催しました。平成 6 年度には松前町「教育の町」宣言 30 周年記念事業の「出作遺跡とそのマツリ」展への展示、および図録作成を行いました。平成 11 年には、しまなみ海道の全線開通を記念して、上浦町との共催で「しまなみ海道遺跡展」(開催場所：村上三島記念館)を開催したところ、6 日間で見学者が約 1,000 名も訪れるほど盛況でした。

そのほか、昭和 60 年度には愛媛新聞創刊 110 周年記念企画の「よみがえる伊予の古代展」に参画し、同時に新聞紙面に調査遺跡の紹介なども行いました。平成 12 年には、建設省(現：国土交通省)や道路公团四国支社(現：西日本高速道路)の依頼で、川内 IC 近辺に建設省が準備した施設や、石鎚山ハイウェイオアシスで、高速道路建設に伴って発掘を実施した遺跡の展示会を開催しました。

平成 17 年の衣山事務所移転を機に、建物一階に展示スペースを設け、遺跡速報展「いにしえのえひめ」と、各時代を概観する「時代(とき)のものさし」と題した展示を、平成 22 年度まで開催しました。平成 20 年度から 23 年度までは、「いにしえのえひめ」展を前期(報告書刊行遺跡編)、後期(発掘調査編)に分け、速報展に力を入れるようになりました。しかし、センターには本格的な展示用のスペースはなく、せっかくの展示が多くの県民に見てもらえないことが課題でした。



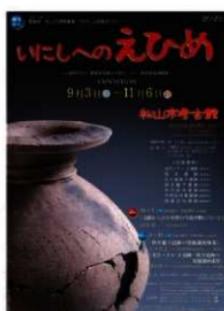
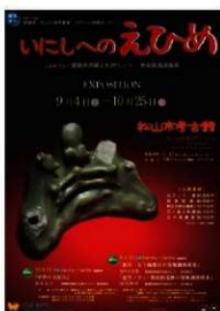
センターでの企画展示

そのような課題の解決策として、平成 24 年度から愛媛県・松山市連携事業「古代いよ発掘まつり」の一環として、松山市考古館を会場に速報展を行うことになりました。



「いにしへのえひめ」の展示（松山市考古館）

松山市内の調査遺跡を紹介する「掘ったぞな松山」では、前年度に松山市埋蔵文化財センターが発掘した遺跡と、当センターが発掘した松山市内の遺跡を合わせて展示する速報展とし、そのほかの県内市町での発掘調査成果は、「いにしへのえひめ」展として当センターが展示を担当して開催しています。各遺跡の概要や代表的な遺構の紹介、遺物の展示を行い、合わせて発掘担当者による遺跡報告会も実施しています。



「いにしへのえひめ」展ポスター



発掘へんろ展

また、平成16年度から、四国4県および松山市の埋蔵文化財センターと共同で「発掘へんろ」展を開催しています。「古代も、四国はひとつ～遺跡でめぐる伊豫・土佐・讃岐・阿波～」の基本理念のもと、四国埋蔵文化財センター発掘へんろ実行委員会を立ち上げ、各県が選んだテーマをもとに毎年展示が行われています。当初計画した5ヶ年が終了した後に、「統・発掘へんろ」展として継続し、現在は再び「発掘へんろ」展として毎年開催しています。

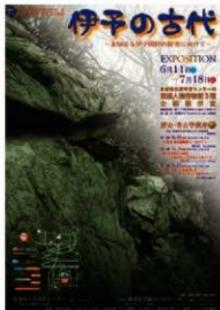
四国4県に視野を広げて、多様なテーマ設定で企画する本展示会は、四国4県の遺跡をつないで巡る貴重な機会となっています。

さらに平成19年度から県生涯学習センターとの共催により、毎年テーマを決めて企画展を開催しています。これまでに発掘調査を行った遺跡を様々なテーマで分析し、研究成果を公表する場ともなっており、多くの遺跡が取り上げられ、大量の出土遺物が一堂に会する本展示は、センターならではの特徴あるものです。

また、企画展に合わせて、各分野の専門家による講座や講演会も実施し、多くの来場者を集めています。

これまでに開催した生涯学習センターでの企画展

2007年8月4日～9月2日	2000年前にタイムトラベル!! えひめ弥生の暮らしとマツリ
2008年7月26日～9月7日	弥生・古墳時代の土壇原遺跡群 生涯学習センター付近で見つかった墳墓と副葬品
2009年7月25日～8月31日	いにしえの美 -掘り出された宝物-
2010年7月24日～8月31日	中世えひめの考古学 -源平の争乱から戦国時代を生きた人々の歴史-
2011年6月25日～7月31日	海の考古学 -愛媛に生きた古代の海人-
2012年6月23日～7月29日	遙かなる縄文の記憶 -最新成果から探る愛媛の縄文時代後・晩期-
2013年6月22日～7月28日	えひめ弥生時代の絵画 -二千年前の絵画に何が描かれていたのか-
2014年6月21日～7月27日	えひめ災害の考古学 災害の過去と未来を結ぶ
2015年6月20日～7月26日	遺物から見た愛媛の中の韓国文化
2016年6月11日～7月18日	伊予の古代 -未知なる伊予国府の探求に向けて-
2017年5月27日～7月2日	伊予の木工芸
2018年6月9日～7月16日	湯築城跡 -発掘調査開始から30年を迎えて-
2019年6月8日～7月15日	愛媛発掘平成史 新たなる時代を迎え、30年の軌跡を振り返る(前編)
2020年7月4日～8月2日	愛媛発掘平成史 新たなる時代を迎え、30年の軌跡を振り返る(後編)
2021年5月29日～7月4日	伊予の鍛冶 -今治平野の古代から中世の鍛冶工房を中心に-
2022年6月4日～7月10日	伊予の弥生集落 ~最新の研究成果からその実相に迫る~



県生涯学習センター企画展ポスター



企画展会場のようす（県生涯学習センター）

企画展関連講座

2. 講座・講演会・シンポジウムの開催

昭和 56 年度に砥部町で「砥部町内の埋蔵文化財」、昭和 61 年度には県老人福祉センター高齢者大学校で「愛媛の文化遺跡」の講座に職員を派遣、この講座は平成に入り、県生涯学習センター「愛媛長寿学園」、さらにコミュニティ・カレッジ「愛媛の埋蔵文化財講座」へと継承され、現在も継続して実施しています。

市町が行う「考古学講座」には、職員派遣だけでなく講座立案でも協力しています。西条市の「西条市考古歴史館考古学講座」や、八幡浜市の「歴史・文化探検」学習会など、長期間にわたって継続しているものもあります。また、愛媛新聞社のカルチャースクール「楽しく考古学－入門編－」には毎年講師を派遣しています。

平成 24 年 7 月には、公益財団法人移行記念講演会「古事記編纂千三百年記念講演会」を開催しました。

また、平成 29 年度に今治市・今治市教育委員会と共に「伊予国府を考える－今治平野の古代遺跡、その分析と国府発見の試み－」展を開催、あわせて講演会・シンポジウムを実施しました。この事業は、未だ所在不明な伊予国府発見に向けて、市民に向けて研究成果を公表することで、伊予国府発見の機運を高めることを目的としました。平成 30 年度も継続し、「伊予国府発見に向けて」と題したシンポジウムを開催したところ、多くの参加者を集め、関心の高さを示しました。その後も今治市の伊予国府跡推定地確認調査のサポートを行っています。



八幡浜市「歴史・文化探検」学習会



「伊予国府を考える」シンポジウム

3. 刊行物の発行

【甦る埋蔵文化財】 昭和 59 年に主要遺跡を紹介する写真集「甦る埋蔵文化財」を発行、昭和 60 年には第 2 集「宮前川遺跡」、平成元年には第 3 集として、センター設立 10 周年を機に、職員の研鑽と研究の深化を目標に、『国史跡法安寺跡』の古代瓦を資料集としてまとめました。平成 3 年には第 4 集を出しました。



甦る埋蔵文化財



埋文えひめ

【埋文えひめ】 昭和 59 年度から情報発信の場として所報「埋文えひめ」を年 2 回発行し、遺跡速報、発掘調査報告書の内容や、重要な遺構・遺物が出土した遺跡の特集を行ってきましたが、平成 11 年度から 14 年度までは「しまなみ海道遺跡展」、「土器づくり」、「青銅鏡をつくる」、「えひめ弥生土器文様素描」の特集号としました。



図録

【図録】 平成 28 年度から、県生涯学習センターで実施した展示や関連講座の内容を記録した図録を刊行しています。「伊予の古代」「伊予の木工芸」「湯築城跡」「えひめ発掘平成史」などを作成し、販売しました。また、今治市との共催事業の「伊予国府を考える」も刊行しました。

【年報】 平成 11 年 8 月に前年までの 4 ヶ年の調査遺跡を収録した年報「愛比光」(『古事記』国生みの条の「伊予國を愛比壳と謂う」から)を発刊、平成 11 年度からは単年度記述で発掘調査速報だけでなく、普及・啓発事業の内容も記載しています。

令和元年度からは、一般の方にも見てもらいやすいように写真を多用したデザインに変更し、好評を得ています。

【研究紀要】 平成 12 年度からは、職員の日頃の研究活動や調査報告書に書ききれなかった論点を紹介する研究紀要「紀要愛媛」を刊行しています。平成 22 年度には「特集－愛媛の考古学史と今後の課題－」と題して、当センターの調査成果を中心とした各時代の研究史を振り返り、今後の調査・研究の指針となる成果をまとめました。



年報「愛比壳」



研究紀要

4. その他の活動

【現地説明会・遺跡報告会】 現地説明会は、発掘調査を行っている遺跡に立って、遺跡を実感していただける貴重な機会です。そのため、できる限り発掘調査現場の調査中や重要な遺構・遺物が見つかった時に現地説明会を開催しています。

近年では、今治道路の発掘調査が規模が大きく、発掘現場を公開する現地説明会では、毎回100名を超える多数の参加者に来場いただき、多い時には400名を超えたこともあります。平成25年度には松山外環状線開通を受け、広範囲に発掘調査を実施した北井門遺跡の内容について「遺跡報告会・資料展示会」を松山市石井公民館で開催しました。このように、現地説明会に代えて、後日地元住民の方を対象に遺跡報告会を開催することもあります。

新型コロナウィルス感染防止の観点から、思うように現地説明会が開催できない時期もありましたが、HP上で動画を公開したり、地元の方々のみを対象に人数を絞って実施するなど、その時しか見ることのできない遺跡の情報発信に努めています。



現地説明会・遺跡報告会の様子

【指導・助言】 市町の文化財保護審議会や、遺跡整備検討委員会の委員に就任し、指導・助言などを行っています。現在は、愛媛県(史跡湯榮城跡)、松山市・今治市・砥部町・美浜町(福井県)から委嘱を受けています。

【職場体験学習】 地元の学校からの見学や、県市連携事業の「親子歴史バスター」では、実際に調査している遺跡で発掘体験をしてもらっているほか、整理事務所での職場体験学習の受け入れも行っています。



職場体験学習



親子発掘体験

【資料提供】 博物館や考古学関連書籍を発行する出版社から発掘調査現場や、出土資料の写真提供依頼があり対応しています。

【図書コーナー】 県内外の発掘調査報告書や考古学関連書籍については、センター事務所1階図書コーナーで閲覧可能です。蔵書（令和3年3月現在、77,835冊）については、センターホームページ上の「蔵書検索」から検索ができます。

【ウェブでの情報発信】 最近の発掘調査概要・普及啓発事業の内容、当センター発行の発掘調査報告書や年報・紀要のPDFをホームページ(<http://www.ehime-mabun.or.jp>)で公開しています。

また、令和3年度から公式Twitterを開設し、遺跡での発見や整理作業の様子などを発信しています。



センター HP



センター Twitter

VII センターの概要

1. 組織 (令和5年1月1日現在)



2. 役員・評議員 (令和5年1月1日現在)

役員	理事長	前園 實知雄	奈良芸術短期大学特任教授、法蓮寺(東温市)住職 奈良県立橿原考古学研究所特別指導研究員
	常務理事	藤田 享	(公財)愛媛県埋蔵文化財センター事務局長
	栗田 正己	聖カタリナ大学非常勤講師・元松山東高校長	
	加藤 令史	愛媛新聞社 常務取締役・常務執行役員	
	梅木 謙一	(公財)松山市文化・スポーツ振興財団 松山市立埋蔵文化財センター所長(兼) 松山市考古館長	
	西山 俊実	愛媛県教育委員会 文化財保護課長	
	監事	宇都宮 欣穂	税理士
評議員	下條 信行	愛媛大学名誉教授	
	名本 二六雄	愛媛考古学協会 名誉会長	
	豊田 将光	愛媛銀行 常務取締役	
	足立 一志	松前町教育委員会 教育長	
	仙波 純子	愛媛県教育委員会 副教育長	

3. 職員名簿 (令和5年1月1日現在)

事務課	事務局長	藤田 享
	課長・事務局長が事務取扱	藤田 享
	専門事務員・担当係長	河野有美
	事務員	芳野伸吾
	事務補助員	芝加納千
調査課	課長	柴田圭子
	主幹	眞鍋昭文
	主幹	三好裕之
	主幹	乗松真也
	専門調査員・担当係長	松村さをり
	専門調査員・担当係長	池尻伸吾
	専門調査員	松齋竜司
	専門調査員	藤本清志
	主任調査員	西川真美 土井光一郎 石賀弘泰 首藤久士 沖野 実
	調査員	増田晴美 石賀聰子 山口莉歩 青木聰志 佐藤直人
	主任調査助手	岡美奈子 田中いづみ
	調査助手	中野邦子 富山亜紀子 佐野祐樹 岡本真治 古谷里砂子 稲田ア希



アクセス 伊予鉄高浜線 高浜方面行き
「西衣山駅」下車 徒歩1分(駐車場あり)

公益財団法人 愛媛県埋蔵文化財センター

〒791-8025

愛媛県松山市衣山四丁目 68 番地 1

TEL 089-911-0502(代) FAX 089-911-0508

URL <http://www.ehime-mabun.or.jp>



吉野里メガネアサヒキャラクター
あきらん・ダーツあきらんと大型器台

表紙の土器 大型器台
愛媛県指定有形文化財
(北井門遺跡出土、弥生時代後期)



<http://ehime-maibun.or.jp/>



https://twitter.com/ehime_maibun

公益財団法人 愛媛県埋蔵文化財センター
45年のあゆみ

2023年3月

編集 公益財団法人 愛媛県埋蔵文化財センター
印刷 株式会社ハラブレックス